

時の過ぎ行くままに

| 木之下クリニック(鹿児島県医師会理事・指宿医師会理事) | 木之下 藤郎

2006年4月9日の日曜日。19時から公民館で今年度最初のこども会が予定されており、出席するため早めの夕食のきつねうどんが、自宅の食卓に置かれていた。それを口に入れようとお箸を動かした18時23分。指宿消防から電話が入る。「プレジャーボートの事故です。負傷者が十数名。指宿港に19時過ぎに運ばれて来ます。現場救護所の開設を医師会をお願いします」指宿医師会救急担当理事は私だ。テレビから流れるサザエさんのテーマ曲を聞きながら、指宿医師会長の今林正明先生(今林整形外科病院)に連絡を取る。きつねうどんを口に作る事なく、白衣と聴診器を携え指宿港へ車を走らす。プレジャーボートで十数名の負傷者？頭で想像ができないまま、すぐに指宿港に着いた。

消防、市役所で机一つの救護所が既に開設されていた。「医師会到着しました。状況は？」『種子島から指宿へ向かう高速船が佐多岬沖で何かに衝突。負傷者がいる模様で、指宿港に運ばれてきます』『高速船？…』そりゃ十数名の負傷者で済むか？救護所から現場は見えない。海の向こう。

マスコミの動きは早い。19時半には救護所はマスコミに取り囲まれライトに照らされる。意を決したかNHKを名乗る記者が一人声を張り上げる。『どうなってるんですか。状況を教えてください！』まだ詳しい情報を得られていない関係者は、答える事ができない。NHK『なぜ黙っているのですか。何か隠す事でもあるんですか！』カチン！私の頭が鳴った。「まだなんも情報が無かとじゃ。入ったら教ゆって、黙って待っとれ」もう

ちょっと丁寧な言葉をとったが、そんな事を言った。彼はそれ以降おとなしくしていた。マスコミ対応は行政の仕事である。救護所の情報を集め「何時何分に発表します」と言っていれば彼等は待っている。行政にそれができないため、これ以降私が矢面に立つ事になった。

20時を過ぎても負傷者は運ばれて来ない。海上保安庁の職員から電話番号を書いた紙が渡される。乗客に医師がいるらしい。根路銘先生だ。「指宿医師会救急担当理事の木之下です。先生、お体は？無事ですか？」

『腰が痛いのですが、どうにか動けます』

「そうですか。申し訳ありませんが教えてください。乗客にどれほどの怪我人がいますか？」

その問いに根路銘先生の語調が強まる。

『乗客のほとんどが怪我をしていますよ。重傷者も十数人います』

これが一番の情報であった。110人の乗客のほとんどが怪我。重傷者十数人。大規模集団事故である。指宿地区だけでは対処不能である。大きく息を吸い海に向かって考えた。

去年(2005年)4月の尼崎での列車事故。死者が100名を超えた凄惨な事故。その資料を消防から頂き、その反省を生かした救急訓練を去年の9月に行っていた。重傷者の搬送を優先。1つの医療機関に患者が殺到しないよう、機能不全にならないよう搬送先を分散させる。軽傷者の搬送は最後。消防に「ヘリコプターの依頼は？」と聞くと『鹿屋自衛隊に連絡済です』と答える。「もう来てもらえ」『いや。10分で来られますので、鹿屋で待機してもらっています』『そうか』少し不安。

指宿消防の救急車は5台。そこに鹿児島市から3台。枕崎市から1台。知覧町から1台。計10台の救急車を確保し指宿港に待機してもらっている。

21時過ぎ、宮田先生（池田診療所）が応援に来てくれた。ちょうどその時、巡視艇で3名の重傷者が運ばれて来た。狭い船上に3名が寝かされているが、消防1組3人、医師2人が入ったら足の踏み場もない。油断すると海に落ちそうだ。女性1人は眉間が腫れ内出血だろう、鼻血も出ている。シートベルトをしておらず、前の座席の背もたれ部分で前額部を強打した。頭蓋底骨折も予想される。意識はあるのだが答えに窮する。男性2人は腰の激痛だ。シートベルトをされていて腰にダメージを受けている。動かすのに難渋する。こちらの問い掛けにもまともに答えられない。1人でもへりを使おう。「自衛隊にへりの要請を」救助隊隊長にそう指示するも『いや先生。救急車の方が速い』そう答える。「本当か。へりは使わないのだな」再度確認するが隊長は譲らない。議論している暇は無いし、反論できる明確なデータが私の頭の中に無い。この3人は鹿児島市内の別々な病院へ、鹿児島市からの応援の救急車に搬送してもらおう。

本部の机に集まり搬送者の氏名を確認するが、男性2人が救急と私で一致しない。本部の周りを取り囲んでいたマスコミへ報告しなければならない。「負傷者3人が運ばれて来ました。女性は頭。男性2人は腰に怪我があるようです。男性2人の氏名も確認をしましたが、救急と私とで一致しません。もう少し丁寧に聞き取りをすべきでしたが、医療機関への搬送を優先させてください。家族へは搬送された医療機関から連絡を取ってもらうようにします」こう話すと質問攻めを覚悟していたが、それほど出ない。「はい。他に何かご質問がありますか？」こう問うと一瞬間が空いた。「はい。それではここを空けてください。ここは本部だ。取り囲まれると仕事ができ

ない！」マスコミも散ってくれた。当時警察も規制線を引いてくれなかった。それで彼等は自由に動けた。それが現場の混乱を助長させる。

21時半、8名の負傷者が運ばれて来て船舶事務所内に3名の負傷者が簡易ベットの上に寝かされる。それと一緒にテレビカメラも入って来た。私が診察していない負傷者に取材を始めている。私は耐えていた。しかし怪我をした父親の手を取り「お父さ〜ん」と話しかけている娘の間に入り、その父親からコメントを取ろうとする彼等を見た時、ピキッ！私の頭が鳴った。「あ〜お前たちや邪魔じゃ！何の権限があつてここに入っておるんじゃ！出て行け！」もう少し丁寧な言葉をとら思ったが、そんな事を言った。彼等は黙って出て行った。娘さんが私を見て「ね〜」と同意してくれたので、これで良かったのだろう。この内7名は指宿市内の医療機関に分散させて搬送した。残りの1名は9歳の女の子。ピンクのリュックサックを背負って棧橋をトコトコ歩いて出て来た。「どこも痛くない？」『どこも痛くありません』はっきりと答える。自発的に港に来てくれた1人の国立指宿病院の看護師さんに「この子に付いていてください」と頼み、船舶事務所の職員に「この子に水と何か食べ物！」とお願いをした。30分程で鹿児島市内から親が駆けつけ「この子は強かったですよ。誉めてあげてください。それと明日は必ず医療機関を受診させてください」と引き渡した。

『木之下先生〜！宮田先生が呼んでます』救急がそう叫ぶから船舶事務所から外に出て棧橋へ向かうも、宮田先生の姿が無い。役割分担で巡視艇の近くにいるはずだが。後に分かったが宮田先生は数人の医師、看護師、救急救命士と巡視艇に乗り込み、高速船へ向かった。しかし現場の波が高くなり、高速船に乗り込める状況ではなかった。

海上保安庁から対策本部の山川港への移動が要請された。負傷者を乗せたまま高速船を山

川港へ曳航するという。22時半、対策本部を山川港へ設置。私も車で山川へ移動した。救助は山川-根占フェリーの発着場所に対応する。しかしその駐車場はテレビの中継車が真ん中にドン！と構え、その周りも負傷者の家族か、野次馬の車か分からないがスーパーの駐車場状態。満車。これじゃ救助に支障が出る。生駒茂先生（生駒外科医院）と一緒に階段に上り「警察～！ここに止まっている車、全部出せ。動かん車はレッカー移動じゃ！」と叫ぶ。警察がハイハイと動く前に、協力的な住民は車を動かし、駐車場を空けてくれた。テレビ中継車は最後まで動かなかった。浮き桟橋に高速船を着けるといふ。高い階段があるが後は軽傷者だから問題はないだろう。そこからフェリーターミナルビルに負傷者を運ぶ動線を確認し、その横にブルーシートを敷いて、ここで二次トリアージを行う。搬送する救急車の動線も一方通行にする。そうこうしていたら日赤から医師、看護師、事務の応援部隊が到着してくれた。点滴を中心に医薬品も多く持って来てもらった。助かった。準備はできた。

23時半、高速船が山川港へ到着。宮田先生と一緒に船内に入る。所々屋根が落ち床に乗客が寝かされている。血の臭いもする。思った以上に悲惨だ。タンカにしたのだろう、トイレのドアも外されていた。事故が起こってから5時間。女性も大変だっただろう。宮田先生に船内トリアージを任せ、搬出順位を付けてもらう。私は船外で二次トリアージを行う。救急隊には各医療機関の負傷者受け入れが何人可能かを確認してもらい、紙に一覧表を書いてもらう。それを確認しながら私が搬送先の医療機関を救急隊に指示する。これは去年の救急訓練で練習済だ。しかし軽傷者だけと聞いていたが次から次にタンカで運ばれて来る。情報伝達がうまくいっていない。山川の消防団もタンカを抱えあの高い階段を必死になって昇り降りしている。彼等はさっきまで会合をしていたのだ。年度始めの日曜日

の夜。顔が赤いのは仕方が無い。もうその頃には私も含め医師10名、看護師37名が現場に来てくれていた。それぞれ負傷者に付いてもらい、意識呼吸などの異常を感じたら報告してもらい、搬送順位を上げていた。歩ける人は軽傷者として鹿児島商船が準備した大型バスにウオークイン。重傷者の搬送が終わるまで我慢してもらった。しかし30分おきぐらいに医師に状態の変化がないか見回ってもらい、不満をなるべく吸い取れるよう配慮した。搬送が最後になる軽傷者の扱いを誤ると、現場は混乱するのだろう。幸い騒ぎ立てる人もおらずありがたかった。

しかし医師として負傷者を診るに、なんの検査機器もない港で、私の手を負傷者にかざして怪我の状態が分かればいいが、その能力はない。宮田先生とも話したが「この人達はなぜにこんなに痛がるのだろう。骨盤骨折にしては状態は落ちていない。腰椎圧迫骨折でこんなに痛がるか？」後に医師としての無力さも突きつけられる事になった。

深夜1時過ぎ、負傷者の搬送が終了した。「終わったな」とフェリーターミナルビルを出ると、軽傷者を乗せていたはずのバスがそこにいない。私のコントロール外で指宿市内、鹿児島市内の医療機関へ向かったという。軽傷者とはいえ3～9人の患者が深夜に個々の医療機関に受診することになった。指宿市長を前に各機関整列し活動報告。医師会も年配の先生に前に立ってもらおうとしたが「お前が一番走り回っておったたっで、お前がせい」と言われ、私が報告した。その後各先生方や看護師さんにお礼の挨拶をする間もなく、おとなしくしていたNHKの記者に捕まる。周りをテレビカメラに取り囲まれる。何を話したかは定かではないが、誘導尋問的な質問が多かったように思える。それに同調することはせず、推察で物を喋ることはなるべく避けた。事故がおおごとになっていたため、そこらあたりは気をつけたつもりだ。「まだ仕事

が残ってますから」と、適当に取材を切って車へ向かうが、共同通信社の女性記者など3人ほどが付いて来て色々聞いてくる。テレビで見ると下がりつて、こういうものか。言葉を選びながら返事をし、車に乗り込む。

医師会事務所で事務長の山野さんが待っていた。県、県医師会、今林会長に本部解散の報告をする。その時今林先生から『木之下先生。大変な事になっちゃっど』『ど、どうしたんですか?』『腰が痛かしは腰椎破裂骨折じゃ』『破裂…』だからあんなに痛がっていたのか。つい言ってしまった。「先生、その情報が早く欲しかった。知っていればもうちょっと対処に何かできたかもしれません」自分の能力不足を棚に上げ、今林先生に愚痴る始末。『あ～そうじゃっどね～。病院から現場に伝えんといかんかったね～』今林先生も疲れているだろうに、気を遣わせてしまった。人間としても度量が違う。少し落ち込みながら家路についた。途中で今林先生から電話『木之下先生。1人患者を頼ん。こっちはもう一杯じゃ』『はい』やはり第3腰椎破裂骨折の男性だ。深夜3時過ぎに搬送されて来た。今林先生の指示の薬を点滴から流し、朝を迎えた。自宅で少し仮眠を取れた。昨夜から食事も取れておらず指宿から山川へ移動中に缶コーヒー1本を飲んだだけだが、空腹感はない。パン1枚をほお張り8時半からの通常診療に向かう。

患者さんから『先生。夕べは大変じゃったな～』テレビのニュースに出ていたらしい。指宿から鹿児島市へ走る救急車の音も鳴り止む事がなかった。うちに搬送された患者さんも、鹿児島市への搬送を救急へ依頼したのだが、搬送3人待ちという。11時過ぎにやっと順番が回ってきた。救急隊員もふらついている。「昨夜寝た?何回搬送した?』『寝てません。5往復目です』ご苦労様である。「他の地域からの応援は?』『ありません』パキ!私の頭が鳴った。ちょうど県医師会から電話

をもらったので吠えてしまった。「あれほどの大規模事故。事故当日で完結できるはずもなく、翌日の今日も相当数の搬送が予想できるはず。それをどうして他地区からの救急車の応援は、事故当日のみで終わっているのですか?」丁寧な言葉で言えた。医師会から県へ依頼するのが筋だろう。最終的に受け入れ医療機関と患者数は指宿市7機関27人。鹿児島市16機関63人。県外1機関2人。

2ヶ月後、私の所に搬送され鹿児島市内の医療機関で手術された方の、奥様が来られた。1回の手術では済まずに今週再手術になるという。『夫はまだ歩けません。先生、あの日からうちの時計は止まっています』と奥様がおっしゃる。「止めちゃダメだ。障害は残るだろうけど、必ず家族にとって笑える日が来ると信じ、進んでください」そう言うのがやっとだった。その2ヶ月後『先生、その患者さんが来られてます』受付から連絡が。待合室に両手に杖をついてはいたが、その方が立っていた。それも笑顔で。「よく頑張ったですね～」隣で奥様も笑顔を浮かべている。『この前、先生の所に来てから、夫の状態も良くなって来ました』良かった。いろんな所でみんなに誉められたが、2人の笑顔が私にとって一番の褒美であった。

2024年4月から医師働き方改革が始まる。これで医師のワークライフバランスの向上や医療安全の向上が期待されている。我々は経験という薄っぺらいものの枚数を重ねて、今を生きている。これからの若い医師にはその絶対数が不足してくる。我々が研修医、勤務医時代に夜も眠らずに患者さんを診ていた話は、若い研修医にとっては時代劇である。との吉原先生のご指摘に「なるほど」と、膝を打った。時代劇であれば残さなければいけない。伝えなきゃいけない。勝手にそう思った。記憶とは亡くなるものであろう。

時の過ぎ行くままに。

よいお年を。